

---

# キラーズゲーム

SEIYOUZIN

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

キラースゲーム

### 【Nコード】

N9019K

### 【作者名】

SEIYOUZIN

### 【あらすじ】

ルール1

ターゲットを選定した者は相手にそのターゲットの個人を特定できる情報を提供しなければならない。

ルール2

ターゲットに対する相手の行動に関して邪魔をしてはならない。

ルール3

ターゲットの殺害に成功した者は相手にそれと解るよう、死体を報道されるであろう形にしなくてはならない。

ルール4

ターゲットの情報のやり取りは結城家のポストを用いて行う。

ルール5

先に相手を殺した者がこのゲームの勝者となる。

## 0 - 1 四回目的

僕の両親指が頸動脈特有の固さを捉え、僕は嘆息とも恍惚ともとれる溜息とともに彼女の首を強く握った。

抵抗はない。彼女は僕特製のスタンガンで失神していたから。

次第に彼女の顔から血の気が引いていく。生物が物質に変わっていく様は不思議だ。

とろり、彼女の唇の端から涎が垂れた。僕は正視できず、視線を窓の向こうに移す。

丑三つ時の闇の向こうに川が見える。それを横切るように電車の高架。車内はクーラーで快適だけれど、外は川の水が蒸発し、高架の鉄骨を溶かしてもなんら違和感ない熱帯夜であることを僕は知っている。いや、ごめん。それはちよつと言い過ぎだ。

気が付くと見慣れた制服を着ているのは彼女ではなく人形になっていた。

この眉をひそめたくなくなる感じはマスターベーションを終えた後の居心地の悪さと良く似ていた。

その首を結んでいた両手を解き、その唇の部分をシャツで拭く。

ついさつきキスしたばかりの唇にもうあの柔らかさはなく、ただゴムのような弾力があるばかり。

人形のはだけた服を直していて気が付く。

さつき涎を拭った裾の部分が赤く汚れている。口紅が移ったのだらう。

その鮮烈な紅さを見て、ふと思った。

これもダイニング・メッセージって言えるのかな？

ホント、うんざり。

なんかこう、劇的ななにかがおこんねーかなあ。

僕が思ったのはそんな他愛のない事だった。

## 0 - 2 退屈な物語

チャイムの音で目が覚めた。

机に突っ伏して寝ていたので体中固くなっている。

椅子には座ったまま、両腕を伸ばしてストレッチ。

周囲を見回すと、まだ2時間目が終わったばかりだということに誰も彼もが弁当を持ち寄って集まっていたり、購買でしか売ってないパンを机に出したりしている。

早弁にしてはみんな堂々としたものだ。そもそも早弁とは授業中、教師の目を盗んでやるのが良いっていうのに。

「みんな、わかってないなあ」

「多分わかってないのはキリヤのほうじゃない？」

僕の呟きにわざわざ返答する人間は一人しかいない。

ユキだ。といっても勿論こんな真夏に雪が降るはずがない。

春日 ユキ。それが僕の幼なじみの名前である。

「わかってないって、何が？」

「あれ」

彼女が指したのは黒板の上に掛けられた時計。

「あ、ごめん。僕ああいう面白味のカケラもない画一的な物質は視界に入れないようにしてるから」

「寝過ぎたという自覚はあるわけだ」

ユキがその細く、白い手で僕の髪に触れる。

「ねぐせ」

僕の目の前で身を乗り出すものだから、僕の視界はユキのグラビアアイドルみたいな胸で一杯になる。

「前から思ってたんだけど、物凄く邪魔そうだね、これ」

目の前の脂肪の固まりに向かって話し掛ける。

「ホントそれ。たまにちぎってやりたくなる。ちぎったらキリヤにあげるね。似合うよ、きつと」

目を惹く彼女の美貌。その童顔のなかでも一番印象的なのはその瞳の輝きだろう。

春日 ユキという少女はおおよそ完全な器を持っていた。白い肌、長く真っ直ぐな黒髪、流れる様な腿から踝にかけての流線型。

「これで性格破綻者でなければ春日 ユキは完璧だったのに・・・」  
「殺すわよ、あんた」

彼女の鋭いフック（ユキは運動神経も抜群なのだ）をかわして、あることに気が付く。

「あれ？探偵は？」

探偵・・・出雲 マコトがいない。朝は見掛けたので休みではないはずだ。

「出雲くん？そういえばいないな。またどっかでサボタージュしてるんじゃない？」

「エクソダスかもね」 マコトは今僕が最も警戒しなくてはならない人物だ。

彼は今年の四月、同じクラスになってから2件の殺人事件を解決した有名人である。

ただし、どちらの事件も事件関係者といえる人々の生存数は、0。

それでついたあだ名が「皆殺し探偵」。酷い話だ。

だが、世間がどう評価しようともその脳漿は本物だ。

僕はこれまで殺した四人を山に埋めて隠している。まだ事件は発覚していないし、今後もそうなることはないだろう。けれど、注意するに越した事はない。

いくら僕が異常者とは言え、異常と心中するつもりはない。

「で、昼はどうすんの？もし食べるものが無いなら私が」「まずいからヤダ」僕がユキに無理矢理口をこじ開けられ、黄色い物質を流し込まれようとしたとき、ナイスなタイミングで声が掛けられた。  
「結城くん、ちょっといいかな」

同じクラスの安藤。ヲタクを思い浮かべればそれが安藤の容姿

だ。

漫研に所属しており、授業中でも絵を描いてるヤツである。

「下級生の女の子、来てるよ」

イカした仕種で教室の戸を指す安藤。キミはもっと自分について知った方が良いのではないかね？

「昼ご飯が来た」

「あんたいつか刺されるわよ」

僕はユキの呆れ返った声に首を傾げた。

「結城先輩、ずっと憧れてました！」

「お昼ご飯は？」

「え？」

「いや、なんでもないよ」僕は内心ガツカリしたけれど、それを隠して微笑んだ。

校舎裏。弓道場の隣。遠い喧騒。そこに立つ一組の男女。恥ずかしくなるくらいテンプレートなシーンだ。

「えっと、三島さん？」

確かついさっきされた自己紹介ではそんな名前だったはず。三島だか三宅だか・・・ミケだっけ？

「あ、はいっ！」

彼女は見ているこっちがきんでしまいそうなくらい力強く頷く。あ、ちよっとかわいい。

「僕に憧れてくれるのは嬉しいよ。でも、僕ら初対面だよな？」

「結城先輩が変に思うの、仕方ないと思います。今時いませんよね、こういうことする子」

自覚はあるわけだ。

「前から気になってたんです。凄い綺麗な人だなあって。それで、気にしてたら球技大会の時とか中間試験の結果とか・・・凄いじゃないですか。そうしたらいつも何考えてるんだろ、何が好きなんだるとか気になってきて・・・って何言ってるか訳わかんないですね、

「ごめんなさい」

俯いて真つ赤な顔で必死に話す三島さんは、その小さな身体も相まってなんだか手の平に乗せちゃいたい欲求に駆られる。

でもね、三島さん。あなたは勇気を振り絞って言ったんだろっけど、そのどれもが僕には聞き飽きた言葉なんだよ。

「えっと、ともかく、凄く憧れてるわけなんです」「ありがと。僕、部活やってないからさ、そういうの嬉しいよ」 笑いかけてあげるだけで彼女は世界一の幸せを掴んだみたいな顔をする。

「それで、よかつたら今度一緒に遊びに行ってもらえませんかっ！」

不意に「僕は四人人を殺しているけれど、それでもいい？」と言ってみたい衝動に駆られたが、実行はしなかった。

「うん。こちらこそよろしく」

あまりに呆気なく答えてしまったからだろう、三島さんは一時思考停止に陥っていた。

「三島さん、今日、帰り暇？」

「え・・・はいっ！」

「そっか。じゃあ、良いところ連れて行ってあげるよ」

良いところとはあの世ではないよ？

### 0 - 3 籠の中で生まれた鳥は空を飛べるのか？

昔流行った歌にこんな感じのフレーズがあったと思う。

籠の鳥は飛び方を忘れてしまった。

それが生まれてから一度も籠から出たことの無い鳥ならどうだろう。

私、三島イイコは正にそういう存在だった。

生まれて以来、先天的な免疫障害で無菌室のベッドの上でしか生きる事が出来なかったのだ。

私の友達達は漫画だった。漫画は私に勇気や恋の素晴らしさを教えてくれる教師でもあった。

だから病気が完治し、一年遅れで入学式に参加した私の胸は期待と不安で一杯だった。

なんて切り出せば良いんだろう、何を話せば良いんだろう。そんなふうには戸惑っているうちにいつの間にかクラスにはグループが生まれ、私は一人になっていた。

結城先輩が噂になりだしたのもこの5月くらいの事だった。

最初は新入生歓迎球技大会のこと。

ただでさえ人目を惹く容姿を持った彼の縦横無尽にサッカーグラウンドを駆ける姿は全校生徒を釘付けにした。

以降、彼が中庭を歩いていけば教室の窓は女の子で一杯になった。

「あ、結城先輩！」

一人がこう言えば、みんな窓に殺到する。

けれど結城先輩はそれを気にする様子はなく、大抵美人の同級生と一緒にだった。

「ちえ、やっぱり彼女持ちかあ」

「しょうがないわよ。結城先輩は鑑賞用」  
そんなやりとりがあちこちでされていた。

勿論私も最初はその美貌に惹かれた。けれど、私はいつも彼方を見詰めている先輩の空気というか、瞳に強く心動かされる様になっていた。

結城先輩の事が知りたい！

夏休みを真近に迎えた七月初旬。私の気持ちは内に抱えておくことが出来ないくらい大きくなっていった。

気付けば先輩の教室に行っており、先輩と二人校舎裏に居た。

先輩は思った以上に素敵な人だった。

先輩は静かで、私の全部を包んでもまだ余裕のありそうな包容力を持っていた。

そんな先輩が私を誘ってくれた！

有頂天で戻った教室の一画では男子達が声を上げて携帯ゲーム機をいじっていた。

あれが生物学上先輩と同じ生き物だとは信じられなかった。

私は午後の授業の内容をちっとも覚える事が出来ず、放課後を迎えた。

先輩との待ち合わせは校門。私は目を皿の様にして校舎から出てくる生徒達の中から先輩を探す。

やがて先輩が現れた。

ある意味当然ともいえる人と連れだつて。

「はじめまして。春日だよ」

真っ白な肌のなかで動く赤い唇はとても美しい。

今まで舞い上がっていて忘れていた。

結城先輩には彼女が居たこと。

「あ、幼なじみただけで彼女とかじゃないよ？」

結城先輩の言葉は安堵すると共に嬉しかった。

私を彼女候補として見ていないと出ない言葉だったから。

「良いところってここですか？」

結城先輩が足を止めたのは駅前のクレープ屋だった。

「甘いもの嫌い」

「勝手について来た癖に文句いうなよ」

なんでクレープ？

「ここ美味しいんだけど、男一人じゃ来づらいんだよね」

確かに店内は女の子向けの可愛らしい装飾に溢れている。

「好きなんですか？クレープ」

私の何気ない質問に結城先輩はうるたえ、少し恥ずかしそうに

「おかしいかな、やっぱり」

と呟いた。

その仕種がかわいくて、意外で、私はつい吹き出してしまった。

「笑うことないでしょ。秘密にしててよ？」

少し拗ねた風な結城先輩はどこか子供っぽくて、私の知る結城先

輩とは別人のようだった。

結城先輩の新しい顔を知る。なんだか、優越感。

「帰ろーよ。私興味無いもん」

「勝手に帰ればいいだろ」

春日先輩を邪険にする結城先輩にまた笑ってしまう。

私たちはクレープを手に（春日先輩は一人だけ野菜ジュース）駅

前の噴水の縁に座って、取り留めのない話をした。

どの先生が嫌いとか、好きなアーティストが誰だとか、休みの

日は何をして過ごすのか、とか。

「動くな」

突然、春日先輩はそう言い放った。

「え？」

「目、瞑って」

有無を言わせない春日先輩の語調に私は固く目を閉じる。

「力入れないで。顔にシワが出来る」

顔の表面を筆のような感触のものが滑り、櫛が髪を梳いていくの

を感じた。

もしかして、これって？

「もう良いよ」

私は恐る恐る目を開ける。そこには鏡があり、今まで見た事の無い私が映っていた。

「髪を内巻き気味にして小顔に見えるようにしてみた。化粧はケバいの合わない顔立ちだからちょっとだけだけど」

これ、私？

つい結城先輩に目を向けてしまう。先輩はにこにこして、「似合うよ」と言ってくれた。

「あの、ありがとうございます」

「やりたくてやっただけだから」

素っ気ない返事。取っ付きにくい人だと思ったけど、いい人だ。

気が付けば日は傾き、街頭には明かりが灯るような時間になっていた。

「送るよ」

といてくれた結城先輩の申し出を断り（帰り道が逆方向だった）、一人暗い住宅街を歩く。

自然、視線は視界の端に映る髪を追い指先はふわふわになった毛先を弄ぶ。

今日は人生最高の日。

そう思った矢先。家と家の間の狭い路地から手が伸び、私をその中間の中に引きずり込んだ。

私は一瞬、何が起きたかわからず、言葉を失う。

すぐ傍、吐息すら聞こえそうな近くに人の気配を感じて総毛立たた。

声をあげなくては、そう思っても恐怖に大きく息をすることしか出来ない。

喉を捕まれた。革手袋ののっぺりとした肌触りが、相手が人ではないもののだと直感させた。

暗くて相手の顔が解らない。けれどなぜか私には相手がある優しい結城先輩の様に思えた。

もう一方の手も首に伸びてくる。両手の圧迫が首を絞めつける。

しかしそれは一瞬だった。

飛来した何が相手の背を直撃し、その衝撃で手が離れたからだ。

「三島さん！」

結城先輩の声だ。

私を襲った犯人は私に目も暮れず路地の奥へと走っていく。

「大丈夫？怪我は？」

結城先輩の手の温もりが制服越しに背中に伝わる。

私はついその暖かさを直接感じたくて、その手を強く握ってしまった。

安心したからだろう、今になって全身が震えてきた。

何だったの今の？暴漢。殺されそうに？感情のない手。闇からの使者？怖い。恐い。

自然と丸まっていた私の身体。それを包むものがあった。

私は結城先輩に抱きしめられていた。

「良く頑張ったね。もう大丈夫だよ」

背中に心地好いリズム。結城先輩が背中をさすってくれているんだ。

「三島さん？」

「・・・イイコ」

「え？」

「下の名前です。イイコって呼んでほしい」

「・・・いい子いい子」

「茶化さないで下さい」

私の声は鼻声だった。

「もう、大丈夫です」

と言いながらも握った手を離せない私。

「家まで送るよ」

手を繋いだまま夜の住宅街を歩く私と結城先輩。

暗がりがあるとつい足がすくんでしまう。

結城先輩はそんな私に合わせてゆっくり歩いてくれた。

「ありがとうございます、助けて貰って・・・」

「いいって。イイコが無事だったから」

結局、家の前で別れるまで、私達は手を繋いでいた。

## 0 - 4 硝子作りの家族

三島さん・・・イイコを家に送り届けて家に帰り着く頃には11時になるうかという時間になっていた。

それにしてもあいつは一体何だったのだろう。

どうせ僕とはベクトルの違う狂人なのだろうけど。

イイコの家を知っておく事は今後役に立つ、そう思って後をつけていたら突然路地に引つ張り込まれるのだから驚いた。

まあ、何事もなくてなにより。

必要な不幸を増やす必要もない。

僕は静かに門扉をすり抜けて、家に入った。

「遅かったね、お兄ちゃん」

甘ったるい声で僕を迎えたのは妹のアリスだった。

「ただいま、いい子にしてたか？」

「うん！」

「ほら、嘘ついた。いい子はこんな時間まで起きてちゃだめだろ？」

アリスはちよつと舌を出して笑った。反省の色は見えない。

「あ、お帰りなさい、キリヤさん」

戸籍上の母がリビングから顔を出した。

「ただいま。ドラマ録画しといてくれた？」

「したけど・・・何が面白いの？あんな安っぽい」「そこがいいんだって。娯楽でまで現実みたくないもん」

母さんは「なるほど」と呟き、頷いた。

母さんはユキと血が繋がっているだけあって美しい。

特にその目はそっくりだった。

「お兄ちゃん、一緒に寝よ」

アリスが僕のシャツを掴む。

「お風呂入ったらね」

僕は母の背中越しにリビングを睨む。

「帰ってきてないわ。今日も」  
疲れを感じさせる重たい声。

「二度と帰って来なければ良いんだ」

「あなたのたつた一人の血縁よ？そんなふうには言わないで」  
僕は謝らなかつた。

父は昔、大手の商社で最も優秀な社員だつた。

10年前にもなるからうる覚えだが威厳と誇りが形を持ったような人だつた。

父の教育は厳しかったが、それでも休みの日には近所の公園まで一緒に行き、キャッチボールをしたり、小遣いがなくなれば内緒でくれる様な、そんな父だつた。

けれど、実母が自殺してそれは一変した。父は職を失い、職を寄り所としていた父は酒に逃げるようになった。

父は近くの大学（僕が殺人の際に使う車を置いている）に再就職したものの、一度壊れたものは直らなかつた。

今となつては威厳など微塵もなく、僕を「キリヤくん」と呼び、劣等感を抱いている始末。

今日もどうせ何処かの屋台で安酒を浴びているのだろう。

「キリヤくん？」

母さんの声に我を取り戻した僕は曖昧に笑つて、風呂場に向かつた。

脱衣所で「もう身体洗つた？」だとか「もう出れる？」だとかいうアリスの声に急かされて、僕は風呂に入り、布団に潜り込んだ。

「お兄ちゃん、今日は面白い事あった？」

「ん？そうだね。ユキが・・・」

「ユキ姉？ユキ姉がどうしたの？」

アリスはユキの大ファンだ。いずれユキと結婚するのだと息巻いている。何言つてるんだか・・・。

ぼつぼつ話をしてしているとやがてアリスは寢息を立て始める。

僕は彼女の顔をじっと見つめた。少女特有の甘い匂い。右脇に感じる柔らかな暖かさ。

僕はいけないとわかっているながら我慢できず。彼女の胸に手をやってしまった。

寝間着越しだった手はいつの間にかその中に潜り込んでいて、僕はその手を引きはがして彼女を起こさぬよう布団から抜け出してトイレに籠らねばならなかった。

白い液体を吸ったトイレトペーパーが流れていく様を見詰めて溜息を一つ。

僕だつて健全な17歳。あんな状況に晒されたら、困る。

翌朝僕は何事も無かったかのようにユキと学校に向かう。

「キリヤ、お願いがあるんだけど」

「めんどくさいから、ヤダ」

何も変わらない一日が始まる。

## 1 - 1 殺人犯の講釈

夏休みが始まった。

僕がこの夏休みで得たものは生まれて初めての親友だった。

僕がこの夏休みで始めたのは一つのゲーム。

その二つは退屈で融けていた僕を目覚めさせ、生きることの楽しさを教えてくれた。

お待たせしました。狂人と変態と死体が彩る物語にようこそ！

「あつっう・・・」

ユキが忌ま忌ましげに手で影を作って空を睨んだ。

あまりに白いその肌に、僕は日焼けより先に彼女が解けて水になっってしまうのではないかと危惧を抱いた。

ユキがロフトの前でどろどろになってしまう事はもちろんない。

8月ももう10日。夏休みが半分終わっていた。

夏休み、と言っても学校にいる時間がアリスの相手をする時間に替わったくらいで、することはかわらない。

ユキとつるんだり、イイコと遊びにいたり、ストックの機嫌を取ったり。

七月以来、人は殺していない。いくらなんでもそんな頻繁に人を殺すことは出来ない。ここは世界一の治安国家の片隅なのだから。

「最悪だ、ホント。良い服は見つかんないし、暑いし、見たい映画はみんなレンタル中」

愚痴りだしたユキは厄介だ。僕は気配を消して天災が収まるのをひたすら待つ。

「こんなことならイイコん家に遊びにいくんだった」

一学期の終わり頃に知り合った三島イイコ。この下級生とユキはいつの間にか随分と仲良くなっていった。

最近ではすっかり染められてしまって「コスプレってやってみた

い」だの「今週のワンピースは熱かった」だの言っている。「スタバいこ、スタバ。このままじゃ私は太陽に殺される」

「真後ろに出て来たばかりのロフトを背にしてユキが言う。

こうなったユキに抵抗も意見も無駄と言うことは長い付き合いで判っていたから、僕は黙ってそれに従う。

道すがら多くの人とすれ違う。夏休みだけあって僕と同年代の人が多い。

僕の目はすれ違う一人一人をつぶさに見ていた。

空想の中で、僕は全員殺していた。

トイレを我慢できない時、その理由を説明出来る人は居ない。だれもが当たり前だと思う。

僕にとって人を殺すというのはそういうことだった。

人を殺すことは大して難しい事ではない。その死を隠す事も同じ。テレビでは一週間に一度は殺人事件が報道されるが、あれは単に運か頭が悪いだけ。

事前に計画を立て、準備すれば残る結果は殺人ではなく永遠の行方不明。

例えば地方から幾分都会のこの町にやってきた大学生がいるとしよう。一人暮らしで親類・縁者は近くに居ない。

バイトをしてもいいし、友人が多くてもいい。

彼は赤い軽四を持っており、彼と知り合いの高校生は彼に運転の仕方を教わる程度には悪友だとする。

その高校生はきっと大学生との夜のドライブの最中、彼を絞殺し、死体を後部座席に寝ているかの様に配置して下見済みの山奥にそれを運ぶだろう。

そこには人一人が収まるだけの穴が既に掘られており、近くにはスコップが埋めてあるはずだ。

高校生は携帯電話と鍵と財布を残して死体を埋める。

高校生が次にすべき事は通帳を確認することだ。

ドコモと不動産会社からの自動引き落としがある事に気が付くはずだ。

翌日彼は大学生の口座にバイトで貯めていた金を入金するだろう。入金に暗証番号がいない現行の制度が彼の手間を一つ減らした。

やがて大学生の携帯電話には家族や友人から連絡があるだろう。

高校生は電話にはでない。代わりにメールを返す。

もちろんそれらメールの相手には会わない。言い訳などなんともなる。人が様変わりする理由などいくらでも想像させられるのだから。

大学生の彼氏には愛想を尽かされ、友人達は次第に離れていくだろう。

それで良いのだ。緩慢に社会から隔絶されていく。それは第二の死と言えた。

それが僕の最初の殺人。

僕は今でも大学生の携帯電話で彼の家族にメールを送っている。

さて、少し退屈な話をしよう。

人は何アンペアの電流が流れると死ぬか。正解は1000ミリアンペア。これは電流の流れる位置さえ良ければ5ミリアンペアまで抑えられる。ちなみに携帯電話の充電器、これは平均で600ミリアンペアの電流を出力する。

人間の皮膚は優秀な絶縁体だけど、体内の抵抗はたった500〜1000オームしかない。

以上を踏まえて、計算して見よう。

皮膚の抵抗は無視して抵抗は500オーム、致死電流量を1000ミリアンペアと仮定する。

オームの法則によって導きだされる電圧は50ボルト。

つまり。コンセントに刺さった電気コードの先を尖らせ、片方を左肩、もう片方を左胸に突き刺せばそれだけで人は死ぬ。

僕のスタンガンはシンプルだ。コンビニで買える薄型のボタン電池。これを36個直列につなぎ、先を尖らせたコードをくつつけただけ。市販の殺傷能力を持たないものよりよっぽどしょぼい。

でも僕はそれで人を殺す。刺し所が悪くても、気絶くらいはしてくれるしね。

僕はストックに電話をかけた。

『・・・はい？』

他人行儀な声。

「夜分にすみません。結城です」

『キリヤくん！？』

「お久しぶりです、先輩」

電話の相手は僕の高校を卒業した女子大生だった。

と言っても彼女が在学している間に知り合った訳ではない。彼女の警戒を解くのに使っただけ。

『本当だよ。元気してた？』

「ええ、まあ」

少し沈んだ声を出してやる。

『そっか。それで？彼女とは上手くいつてるの？』

彼女に近づく為に僕が使った設定が、それだった。

「それが、最近上手くいつてなくて」

『そうなんだ。今から会おうか？電話で話すのも何だしね』

彼女の頭の中には前回の記憶が蘇っているのだろうか、随分とあつさりその言葉が出た。

「でも、もう遅いですよ？」

『こんな時間じゃないと出来ない話もあるでしょう？』

あなたがこんな時間にしたのは話じゃなく、行為でしょう？

正直言っ僕は彼女が嫌いだった。彼女が会ってくれない。そう

いつて弱音を吐く僕の求めるままに服を脱ぐ彼女が。

「わかりました。じゃあ、迎えに行きます」

『前待ち合わせた場所で、待ってるわ』

僕は電話を切って溜息を吐く。

どんなに嫌いな相手でも、金輪際声が聞けなくなると思うと残念だ。

「キリヤくん出掛けるの？」

「友達のところ。先に寝てて」

リビングで10時から始まっているドラマに見入っていた母に一声掛けて家を出た。

車を置いている大学までは徒歩10分。待ち合わせの場所まで車で30分。行きがけに彼女を殺して捨て場所に選んだ谷まで1時間半。帰りに2時間。

それが今日のスケジュールだった。彼女と待ち合わせた場所は人気のない公園の前だった。

静かに僕を待つ彼女の前に車を付け、静かに去る。それだけ気をつけていれば後は何も気兼ねする事はない。

ハズだった。

待ち合わせ場所で僕を待ってたのは手を振る笑顔の彼女ではなく、車に担ぎ込まれる姿だった。

どうということだ？

僕がその場に到着する前にその車は急発進、猛スピードで加速し、走り去る。

ナンバープレートは明らかに違法とわかる濃さのスモークで隠されている。

僕は慌ててその車の後を追うがなにせ排気量が違う。市街を出る頃には見失っていた。

この間のイイコの件を思い出さずには居られない。まったく、この世には頭のおかしい人が多過ぎる。

町と町を遮る峠道。週末ともなれば走り屋が群がるのだが、平日

の夜にすれ違う車はない。

山頂付近で僕は車を止めた。山頂には展望公園がある。何故かと言われれば何となくとしか答えられない。

例えるならば親しい人との以心伝心。

僕は道が広くなった程度の駐車場に車を止め、展望公園へ向かった。

夜、山の四季を楽しむ展望公園に他に人が居よう筈もなく・・・ただ、死体が一つあるだけだった。

死体はベンチの一つにまるで眠っているかのように横たわっていた。

胸に突き立ったナイフは貫通しており、ベンチからは血が滴っている。

別に死を美化するつもりはないけれど、月明かりに照らされたその死体は美しかった。

僕はつい死体に近付き、彼女の命を奪ったナイフにそつと触れた。「な、なんで？」

後ろで、声がした。

聞き覚えのある声に振り返ると、そこにいたのはクラスメイトのヲタク、安藤だった。「安藤・・・なんでここに？」

安藤の目は死体に注がれている。

「君が・・・君が殺したのか？」

「違う。僕はただの第一発見者だ」

今回に限っては紛れも無い事実だ。

「嘘だね。結城くんは馴染みすぎてる。死体のある風景に淀みがない。君には死が似合いますぎる」

妄言だ。死が似合いますぎる？漫画の読みすぎだろう。

中南米辺りの物心着いたときから戦場で育った少年兵がいうならともかく。

「僕じゃない」「嘘」「僕じゃないけど僕もこの人を殺そうと思ってた」

絶句する安藤。

何故僕は本心を吐き出してしまったのだろうか。

狂人と狂人は理解出来るのか、夢みたいな事を考えたのか？

「本当に？それなら・・・凄い」

ほら引いてる・・・って？

「は？」

安藤は背中のナップサックからスケッチブックを取り出し、それを僕に突き付ける。

その絵は死体の絵だった。アニメちっくな目と胸が異様に大きい女がやけにリアルに死んでいる絵。

「ネクロフィリア・・・」 安藤は狂人ではなく変態だったらしい。

「なにそれ？」

「後で教える。それより、そろそろ行こう。面倒な事になるまえに」

「あ。ちよつとまって。写真撮りたい」

ウエストポーチからデジカメを取り出し、四方八方から死体を撮る。

歩く収納スペース、安藤。

「お待たせ。あ、どうしようかこの死体」

「どうって・・・通報するに決まってるだろ」

「ま、そうだよ。常識的に考えて」

## 1 - 2 ゲームへの招待状

車のヘッドライトが轍の出来たアスファルトを舐めてゆく。

幾つかのブレーキ跡を通り過ぎたころ、遂に僕は我慢の限界を迎えた。

「なんで安藤が乗ってるんだよ！」

「だって町まで降りるの大変なんだもん」

安藤は悪びれる様子もなく言つてのけた。

「大体、なんであんな所に居たの？」

「何となくだよ。僕は死体を見るのが好きなんだ。だから死体のありそうな所をいつも巡つてた。そうしたら死体を見つけた。ただの過程と結果だよ」

いや、その理屈はおかしい。

「俺の事はどうだっていいよ。それより結城くん、あの人を殺そうと思つてたつて、どこまで本気の話？」

「本気に半分とか三分の一とかあるの？」

「思う事と実行する事は別の次元の話じゃないか」

「なんで僕が本当に人を殺せるかどうか証明しなきゃいけないの？勝手に判断すればいい」

安藤は暫く黙る。

「……その結城君のゴキブリを見る様な目！酷いけど……いい！」

「うわー、凄い今殺したくなった」

「殺されるのは嫌だけど、言葉でなじつて踏むくらいなら喜んで受け入れたいなあ」

「マジで死ぬ」

安藤は恍惚とした顔で身震いした。本物の変態だ、コイツは。

「ところで結城君は何故あの人を殺そうとしたのかな？」

「……安藤には習慣、つてある？」

「毎日オナニーしてる」

つい左の裏拳を顔面に叩き込んでしまった。

「痛い！でも嬉しい！なんてアンビリバレッツ！」

隕石でも直撃して死んでくれないかなあ。

「まあ良いや。オナニー出来なかつたらどう？」

「ヤだな。つていうか結城君の顔でオナニーとかいわれたらほんとに興奮するな」

オナニーオナニーうるさいやつ。

「嫌でしょ？そういう事だよ」

「ふーん。結構フツーの理由なんだね」

ようやく車は峠を下り、街中に入った。

「あれ？じゃあさ、今凄いやなんじゃない？習慣が出来なくて」

赤信号に車を停車させ、僕は安藤を見詰めた。

「うん。そうなんだ。今、とても嫌なんだ・・・」

真っ赤な光が社内を仄かに照らす。

「・・・君は本当の事を言ってるね。信じるよ」

信号が変わった。僕は車を静かに発進させる。

「ところでこの車はどこに行ってるのかなあ？」

心なしか声が震えている。

「何処だと思う？」

暫く間があつて、安藤が言った。

「何処でもいいけど、俺ん家まで送ってくんない？」

「降りる！」

僕は叫んだ。

翌朝、僕がポストから新聞を取っていると（これは僕の習慣なのだ）、家に警察が来た。

昨日匿名の通報で発見された遺体が最後に連絡を取った番号の携帯電話の持ち主が僕であったからだ。

「彼女との関係は？」  
「友達。出会ったのはファミレス。彼女は店員で僕は客だった」  
「いつ知り合った？」  
「三ヶ月くらい前」  
「何故電話をした？」  
「恋愛相談」  
「何故彼女は君の番号を登録していなかった？」 「番号交換はした。登録していなかった理由は知らない」  
「数十分後何度も電話を鳴らしたのは何故？」  
「待ち合わせの場所に彼女が来なかったから」  
「待ち合わせ場所とは？」  
「ここから自転車で1時間ほど掛かる住宅地の中の公園」

警察の質問は執拗だった。僕は最有力容疑者なのだから当然ではあるのだけど。

母やアリスに心配を掛けてしまった僕はいたたまれず、家を出た。

「よし、今日は映画を見よう」

「こういうときは一人にしてあげようと思うべきじゃない？」

ユキがついてきていた。

僕はユキに引きずられるままシネコンの前まで来てしまった。

「で、何見るの」

ユキの前でうろたえる演技をするつもりはなかった。

「ん、イイコを呼ぶ。見たい映画があるって行ってた」

と言いつつ既にメールを打っている。

「結城」

夏休みの映画館前。雑踏の中でも彼の声は良く通った。

「出雲も映画？」

ユキが彼に声を掛けた。皆殺し探偵に。

「ああ。それもある」

ユキに応答しながらもマコトの目は僕を見ていた。

「何？」

僕はなるべく言葉を話さない様気をつける。

「災難だったか？」

「驚きはしたね。でもそんなに親しかった訳でもないし」

何故疑問形なんだろう。何が災難だったのか明言しないのはこちらの様子を伺うためだろうけど。

「番号を登録していないのは隙を見て彼女のケータイから登録を消したから・・・」  
いきなりだなあ。

「何の事？」

マコトは僕を暫く見詰めて、ぽつりと言った。

「刺さっていたナイフは凶器じゃない」

マコトは僕に興味を失ったのだろう、僕達の横を通り過ぎ、シネコンに入っていく。

「出雲、ティッシュ落ちたよ」

ユキが大声を上げる。

マコトは振り返り、タイルの床に落ちたティッシュに気が付き、引き返ってきてそれを拾う。

「出雲はなにみるの？」

前売券を掲げる探偵。たしか子供と動物達が困難を乗り越えて絆を深める、という感動系のノンフィクションではなかったか？

「あ、それでティッシュ？」

「ああ。俺は涙もろいからな」

再びシネコンに入っていくマコト。その手にはごく普通の箱ティッシュ。

やっぱりこの街には変人が多過ぎる。

暫く待っているとこの真夏に真っ黒でひらひらの服を着たイイコがやって来た。

「ごめんなさい、待ちました?」

「気にしてない」

「待ってない、と言わないところがユキらしい。」

「待った?」

「待ってない、呼んでない、狂ってない?」 イイコと一緒に現れたのは安藤だった。

「この変態と知り合いだったの?」

「はい、おんなじ部活で」

「そうなんだよ。結城くんといっちゃんが仲良いのを思い出してね。電話してみたらこれから会うっていうもんだからね、すわ、僕も行かねばと」

安藤のマシガントークにユキはぼかんとし、イイコは苦笑している。

「結城くん、連れションいこ。連れション」

こいつは下品な言葉を連呼しなきゃ気が済まないのか?

「君に本当に付いてるのか確かめたいし」

取り合えず跳び膝蹴りをお見舞いしておく。

「いっちゃん、殺すつもりじゃないよね?」

安藤がトイレを見回し、誰もいないのを確かめてから言った。

「当たり前でしょ。別に人殺しのために生きてるわけじゃなし、なんでもかんでもそつちに結び付けないですよ」

「でも、現在進行形で人は殺したいわけだ」

「そこまでわかっていて僕と二人きりになるこいつはいったい何なのだろう。」

「連れていけ、っていうのは断るよ」

「なんでえ?」

「やっぱりそのつもりだったか。」

「だって僕、安藤嫌いだもん」

「いいじゃんかよう。人が死ぬところを見たいんだよう」

駄々をこねる子供そのものだ。

「みつともないからやめなさい」

この様子では簡単に諦めそうにない。

どうしたものか、と考えていると聞き慣れた着信音が鳴り響いた。僕は咄嗟にジージパンのポケットに手を伸ばしたが音源はそこではなかった。

「また迷惑メールだよ。どうにかならないのかね、こういうの」

ウエストポーチから取り出した携帯をつまらなそうに仕舞い直したのは勿論、安藤。

「好きなの？サウスケ」

サウスケとはもちろん、皆さんご存知の Sound Schedule の事である。例え最高順位がオリコン11位であろうと、例え数年前に解散していようと誰も知っている事は疑いが無いのだ。少し驚いた様子で僕を見ていた安藤は、ナップサックから iPod を取り出した。

「貸してあげる。きっと気に入るよ」

僕は安藤から iPod を受けとった。が、それについていたイヤホンを引き抜いて

「安藤と同じイヤホンを使うのは嫌だ」

と言ってやった。

家に帰り、三人で夕食をとっていた時分。

僕らは家の前で人が喚いている声に気が付いた。

「・・・アリス。母さんと一緒にいるんだよ」

僕は母さんを一瞥して玄関口まで出る。扉越しにもわかる声の主。

「お前、何してんの？」

玄関を開け、ポストに寄り掛かって大声で独り言に興じている酔っ払いを睨みつけた。

「ああ、キリヤくんじゃないですかあ」

赤ら顔で僕に酒臭い息を吹き掛けてくるこの男と親子の縁を切れるなら、僕はなんだってするだろう。

「家に入って、さっさと寝ろ」

「酷いなあ、キリヤくんはあゝ」

僕の右腕がいつの間にか父を殴っていた。

「親を殴るとはどういうことだ！」

これまでのにやけ顔を一変させて父が殴りかかってくる。

僕は格闘技の心得があるわけではなかったが、たやすくその拳を弾き、再び父を殴る事が出来た。

その事実が嬉しくも何ともないと気付いたのはいつの事だったろう。

僕の一撃によるめいた父はそのまま何も言わず家に入っていった。暫く僕はそこに立ち尽くしていたが、塀を殴ってから自分の部屋に戻った。

ベッドに倒れ込み部屋を眺めた。

ふと安藤に借りたiPodを思い出す。

ベッドに倒れ込んだまま机の上のそれと自分のイヤホンを探り当て、それらを耳に繋ぐ。

「レゾンドートル？」

iPodに表示された歌手を呟く。

流れ出した曲は忌ま忌ましい事に僕の好みを直撃していた。

僕はそれを聞きながら目を閉じ、気が付くと眠っていた。

翌朝、僕が新聞を取ろうとすると、小さな紙がポストに入っている事に気が付いた。

「8/18

幸村 サチ

A 美術大学生

キャバクラ勤務」

そのメモを見た時僕は直感した。

これは挑戦状か、でなければ招待状だ。

### 1 - 3 小さな始まり

「さて、これはどういう意味でしょう？」

漫画研究同好会の部室は意外なことにインクの匂いがしなかった。安藤が言うには漫画にもIT革命の波は押し寄せたそうで、今では下書きをして清書をしたらパソコンに取り込み、仕上げるらしい。確かに何台ものパソコンのモニターに首を傾げる安藤の顔が映り込んでいる。

「何と言われても・・・ただのメモじゃん？」

「個人情報書かれたメモが、一般住宅のポストにある。これが普通？」

漫研の部室にいるのは僕らだけではなかった。イイコやその他部員達のいる室内で顔を付き合わせて小声で話す僕らは浮いていた。

「その心は？」

「これはあの女を殺した誰かが調べたものだと思う」「何の為・・・殺すためだよな、やっぱり。でもなんでこのメモがあの人を殺した誰かのものだと思うの？」

「理由なんてないよ。その方が面白いじゃない？」

なるほど。安藤は得心がいった様子で頷いた。

「で？これをどうするの？」

「このメモに書かれてる女を殺してみる」

「なぜに？」

その声に僕を非難する色は混じっていない。

「これまでの様に死体は隠さない。むしろ報道される様に派手にやる。これで相手から何らかの反応があれば僕の読みはアタリって事になる」

「ただの勘違いだったら？」

「どうもしない。代替え出来るほど命は安くないだろ」

暫く考えて安藤が答えた。

「そうだね。出来ることは墓前に花を添えるくらいだ。そんな事よ  
り、この幸村サチって実在の人物なのかね？」

「勤め先までわかってるんだ、直ぐに確かめられるよ」

外からバットが球を叩く良い音とどよめきが聞こえた。

「でも、キャバクラだろ？こついうところって源氏名っていうの？  
本名はわかんないじゃん」

安藤は二墨を目指して駆け抜けるランナーを眺めている。

「顔と名前。それさえわかれば後はどうにでもなるよ」

学校か店の出た所を尾行し、人気のない場所でさらえば良いのだ  
から。

「いつやるの？」

「出来れば今夜」

安藤が口を開きかけるが、わかりきった言葉を聞くのも面倒だっ  
たので僕は先に答えてやる。

「邪魔しないんなら、勝手について来ればいい」

口を明けたままの間抜け顔で硬直する安藤。

「どうかした？」

「あ、いやね、まさか良いと言われるとは思わなかったからさ」「  
良いなんて言つてない。嫌ならこなきやいいよ」

大袈裟に首を横に振る。

「まさか！着いていくよ。・・・もしかして、漫研に来たのは俺を  
誘いに？」

「なんでそうなるんだよ」

「じゃあ何しに来たの？」

妙に執拗な安藤の詰問に僕は言葉を詰まらせてしまった。

僕のそんな様子をどう受け取ったのか、安藤はしたり顔になる。

「そんなに良かった？レゾン」

僕は窓の外の球児達に目を逸らした。

「ほら、これ」

目を戻すと安藤が一枚のCDを手に持っている。

「結城くんに会ったら渡そうと思って持ち歩いてたんだ。まさか一日目で渡せるとは思わなかったけど」

レゾンデートのセカンドミニアルバムだった。僕はすぐにでもそれを手にしたかったけれど、そうするのも何だかシヤクだった。

「・・・聞いてほしいなら借りてあげてもいいよ」

僕の口ぶりがよほど可笑しかったのだろう、安藤が腹を抱えて大笑いした。

僕は手近にあったジャンプで何度も安藤を叩いた。

高校を後にして僕は件の美大へ足を向けた。

距離はバスを使えば15分程の距離。

計画を立てるには悪くない時間だった。

高校近くの幹線道路に置かれたバス停から北に行くこと10分少々。次第にビル郡が姿を消し、都市計画によって植樹された木々が多くなってくる。

日を燦々(さんさん)と浴び、まるで命そのものを色にしたかのような多様な緑に僕は目を細めるしかない。

そんな絵でも写真でも写しきれないだろう素晴らしい世界を目にして僕が考えるのは人を殺す段取り。

本当にうんざりするよ。

けれど、今回はそれだけではない。心の右奥の方、昂揚するものがあるのも確かだ。

正直に言おう。僕はこの時を楽しんでいる・・・。

バスは坂道をぐったりとした足取りで登りきり、美大前に到着した。

バスを降りたのは僕と学生と思しき数人だけだった。

もう午後4時を回っている。登校には遅い時間なのだろう。

僕はキャンバスや筆等を重そうに肩から吊した彼らと共に校門をくぐり、一人案内板で立ち止まった。

僕が探す施設は校内の最奥、山に面して階段状に作られた大学のてっぺんにあった。

辟易したが、そこまでの道程を幸村サチも歩いたかもしれない、と思うとたまにはちよつとした山登りも悪くないと思えた。

少し歩くだけで脇から汗が滲むのを感じる。

振り返ると緑色の向こう側に窮屈そうな街が見える。それは今にも圧壊しそうに見え、逆にその密度を以て山を侵食しようとしている様にも見えた。5分ほどかかってようやく目的地に到着した。

図書館、と書かれたプレートの下のドアを開くと図書館とか古い家特有の時間の匂いがした。

僕はカウンターを抜けて樹立した書棚を一つ一つ確認していく。文化、科学、歴史、建築、美術……。

僕が探す棚はまたしても一番目立たない場所にあった。学生発表。

一番新しい年代のものから三年間分を棚から取り出して席に着く。図書館にいるのは司書を含めて6、7人。僕を気に留めている様子はない。

僕は分厚い本の厚めのページを後ろからめくっていった。

幸村サチの名前と顔写真と作品の写真が載ったページは直ぐに見付かった。

素朴な目、低い鼻、柔らかそうな唇、緩やかな輪郭に手入れの行き届いていない髪……。

幸村サチの顔は僕が想像していたものとは大きく異なっていた。続いて彼女の作品に目を移す。作品から彼女の内面を伺う事が出来れば接触した際に役立つだろう。

彼女の作品は象形物だった。

真っ白な山型に盛られたものの上に小屋と思しきものがいくつもあり、それらは血管を思わせる赤い線で繋がっていた。そして山の頂上には真円の照明が据えられ、作品を照らしている。

これは良いものなのか駄作なのか。僕には判断出来なかった。  
芸術というやつは理解できない。  
僕は白けた気持ちと一緒にその本を静かに閉じた。

## 1-4 トワイライトストーリー

私は東北の田舎町で生まれ育った。長い冬は山間にぽつんと孤立した町を覆い、短い夏の間には無限の生命力で迫る山の深い木々に身を縮める・・・そんな町だ。

多感な時期に差し掛かり多くの子供達がそうであるように、私も世界の最果ての様な故郷を忌み嫌う様になった。

何処かくすんだような自分の人生はこんな所にいるからなんだ。

都会にいけば、自分も輝く何かを見つけられる事が出来るはず。

きらきら光る雪の景色のなかで、私はよく思っていた。

だから私は敢えて遠くの大学を選んだ。美大にしたのは父が美術館で働いており、幼い頃から美術品の素晴らしさに触れていたからだ。

両親は私の進路に反対した。両親が共に美術の世界で生きようとして挫折した事を知ったのは大学に入って以降の事だ。

けれど私の幼い微熱は私を盲目にし、社会という誰も全容を知ることの出来ない巨大なものに一人で挑む決意をさせた。

私は仕送りに一切頼らず美術家として成功すれば両親も認めざるを得ないだろうと思ったのだ。

半ば喧嘩別れの様な形で私は故郷を飛び出し、学校とバイトに明け暮れる日々を始めた。

最初の一年間は辛かったけれど楽しかった。生きているという実感、人生という名の蠟燭に火が灯り輝いているという感触があった。けれどバイトと授業にスケジュールが埋まり、友達と遊ぶこともままならない生活に私は疲れ始めた。

そんなとき友達伝てにキャバクラで学費を賄っている学生がいることを聞いた。

生来引っ込み思案の私が水商売を上手くやれる自信は無かったけれど、今の生活が少しでも楽になるならと私はその学生に店を紹介

して貰う事にした。

結果私の生活は激変した。いくつも掛け持ちしていたバイトは全て辞めてキャバクラ一本に絞っても月収は30万を下る事は無かった。

そのかわり気が付くと私のハンドバッグには煙草が居座るようになり、服の数は三倍になった。

いけない、そう思いながらストレス解消に散財するのは堪え難い快感だったのだ。

最後に筆を握ったのが何時だったか思い出せない事に気が付いた時には、私の身体には夜の街の匂いが染み付いていた。

細部は異なっているだろうけど大筋はいくらでもある話。21年の私の人生を評するならそんなところだろう。

だから私である必要など何一つ無かった。ただ誰でも良かったというその『誰か』が私だっただけの話。

私の死因は感電死ではない。不運だったこと、それだけだ。

彼らが現れたのは8月半ばの、蒸し暑い夜のことだった。

私は例によって店の人が運転する車で家の前まで送ってもらい、マンションのエントランスに入る為に鍵を取りだそうとした、その時だった。

「幸村サチさんですね？」

車が去った後の道に一人の少年が立っていた。

夜の中にあつて夜より深い空気を纏った少年は、闇そのものにか見えない口を動かして続けた。

「僕は出雲。皆殺し探偵、と言った方がわかって頂けますか？」

その場から一步も動かない影。私との距離は3メートルも無いはずなのにまるで月の兎と対面している様な錯覚を覚える。

「ああ、皆殺し探偵とはいっても、殺人事件ばかりを扱っているわけではないので、ご安心下さい」

彼は私が面喰らっているのをどう捉らえたのか、気安い笑顔でそう言った。

「皆殺し探偵さんの用件は何？」

私は直ぐにでもマンションに逃げ込める様に鍵を握りしめた。

「親御さんのことで、ね」

「両親がどうかしたの？」

ぞくり、と私の背筋を流水のような冷たさが駆け抜けていった。

彼の目が底知れない闇の色に染まっていったからだ。

「ご両親との仲は余り良くないそうですね」

「・・・それが何？」

私は二の腕の鳥肌をさすった。

「僕はあなたのご両親から依頼を受けてあなたの生活を調査していたんです」

「それってストーカーじゃない？」

彼は肩を竦めて「言われ慣れた」と言わんばかりの表情を見せた。「本来なら調査対象であるあなたへの接触は厳禁なわけですが、黙って見ていられなくなりました」

出雲の口ぶりに悪意を感じて私はカチンときてしまった。

「何？私に恋しちゃった？店にくればいくらでも相手してあげるけど？」

「良く言えるね、そんなこと。自分の事好きじゃない癖に」

「ずるい。完全に不意打ちだった。」

心の奥底に溜まった澱を突かれて私は一瞬何も考えられなくなる。「あなたは今の自分を憎んでいる。でも今の状況から抜け出す術を知らない。僕は出来ることならあなたにまた日の当たる場所で生きて欲しいと思ったんです」

出雲が手を挙げる。すると真つ赤な軽四が彼の後ろに現れる。彼は続けた。

「とは言っても、これは僕の勝手なお節介です。幸村サチ。あなたを選んでもらいたい。やり直すか、続けるかを」

夜の闇と同質の重さを纏う沈黙が私たちの間に垂れ下がった。

私は迷っていた。戻るか、続けるか、という彼の問いに対してではない。そんな選択、答えは決まっている。

私が躊躇ったのは彼についていいって良いものか、という点だ。

彼は、何かおかしい。水商売で数限りない他人と関わってきて培われた感性が悲鳴をあげている。

まるで――人ではないものが人の振りをしている様な。

しかし私は思い出す。何も無い山間の家々を。疲れきって布団に倒れ込んだ日々を。

「・・・戻るのかしら」

彼は満面の笑みで赤い軽四の後部ドアを開けた。

その瞬間、私の死は確定したのだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9019k/>

---

キラーズゲーム

2010年10月10日07時16分発行